

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク④⑥

ヤギたちは見ている

堤 康徳

マーシャル諸島のビキニ環礁でアメリカが行った水爆実験によって、マグロ漁船「第五福竜丸」が被爆してから70年が過ぎた。1946年から58年にかけてアメリカがマーシャル諸島で行った核実験は67回にのぼる。「54年3月1日の水爆実験では、周辺海域で操業中だった第五福竜丸の乗組員23人が被爆し、半年後に無線長の久保山愛吉さんが死亡した」という(『朝日新聞夕刊』2024年2月26日)。

1954年に公開されたゴジラのシリーズ第一作(本多猪四郎監督)は、第五福竜丸の被爆が背景にあった。水爆実験の反復によって棲家を追われたゴジラが東京に上陸し、都市を蹂躪したのである。

1946年夏に行われた一連の核実験「クロスロード作戦」では、標的となった艦艇のデッキにヤギや豚、モルモットなどの実験用動物を載せ、被爆による身体への影響を調査した。(ちなみに、2023年に公開された山崎貴監督の『ゴジラ-1.0』の怪獣は、「クロスロード作戦」で被爆して巨大化したことが明示されている)。若きカルヴィーノは、この実験に鋭く反応し、共産党機関紙『ウニタ』(l'Unità, 17 nov. 1946)に「ヤギたちは私たちを見ている」(Le capre ci guardano)と題された記事を発表したのだった。全文を引用しよう。

カリフォルニア州サンフェルナンド・バレーのヤギ飼育者連盟は、「人類の利益」のために犠

牲になったビキニのヤギのために追悼式を行った。半旗が掲げられ、太鼓が連打されるなか、亡くなったヤギのために弔辞が読み上げられた。

次のように指摘する人もいるだろう、広島やトリノやミラノで亡くなった子供たち、女たち、老人たちの追悼が行われたためしはない、と。ヤギと同じように死なねばならなかったのはなぜか、それを知っていた彼らも、戦争の必要性という祭壇で犠牲になったのに。

しかしヤギの追悼の意味は、私が思うに、人類に特徴的な偽善と結びついた、人類の動物に対する秘められた後悔の念に求められる。皆さんは自問したことがあるだろうか、ヤギたちがビキニで何を思ったか？ 爆撃された家の猫や戦争地帯の犬たちがどう思ったか？ 魚雷の爆発に魚たちが何を思ったのか？ 彼らはそのとき人間である私たちを、彼らなりの論理に従ってどう判断しただろうか？ 彼らにも、より単純で、言ってみれば、より人間的な論理が存在するはずだから。

きっと、私たちは動物たちにたいして、補償とは言わないが、なんらかの説明が必要である。私たちが彼らを食べるために殺したり、荷車を引かせたりするのは、理解してもらえないかもしれない。もしかすると、闘牛を楽しむために苦しめたり、実験のために生体解剖することも。それらは、多かれ少なかれ、彼らどうしでも起こる

ことだ。しかし戦争は？ きっと、私たちは動物にたいして説明し、謝罪する必要がある。ときおり私たちが、彼らのものでもあるこの世界を大混乱に陥れることがあるとすれば、私たちが、彼らにかかわりのないことがらに彼らを引っ張りこむことがあるとすれば。

さあここに、人間の偽善が介入してくる。私たちは死んだ動物や戦火を生き延びた動物たちを犠牲者ではなく、いずれも、私たちの大義名分のために身を捧げ、万歳と叫びながら命を落とした英雄として扱ってきた。彼らを私たちの共謀者として、私たちがもたらした破壊の共同責任者としてきた。私たちは、人類の利益のために死んだヤギを追悼し、ラバのために記念碑を建て、鳩に勲章を授与している。私たちの偽善によって、後悔の動機となるはずのものを、自尊心の動機としているのである。「ほら見たまえ——と私たちは言うことだろう——ヤギも鳩も、私たちとともにある！」

しかし、よく考えてほしい、こうしたことは人間にも起こっているのだ。それぞれの戦争の英雄たちに捧げられた記念碑の数々が、もしそれぞれの戦争の犠牲者に捧げられたとするなら、それらはきっと、正当性のない、尊敬と倫理を欠くものとなるだろう。偽善の仮面がはがされることになるだろうから。(Italo Calvino, *Saggi*, Vol. II, a cura di Mario Barenghi, Milano, Mondadori, 2007, pp. 2131-2132)

広島という地名が挙げられていること以外、この記事に核の脅威への直接の言及はない。カルヴィーノの批判の対象は、戦争の犠牲者を、人間であれ動物であれ、英雄の名のもとに顕彰する人間の偽善である。しかし、戦争における人間の人間に対する偽善以上に、物言わぬ動物たちにたいする人間の偽善の告発のほうが目立つ。それは、ビキニ環礁における核実験の材料として、あるいは大国間の核開発競争のため、つまりは人間の勝手な都合で命を奪っておきながら、彼らを「人類の利益」に貢献した英雄とみなす厚かましさへの異議申し立てである。また、動物を核実験の生贄のヤギ(スケープゴート)にすることが許されるのかという単純な問いである。



カルヴィーノが『ウニタ』紙に発表したこの新聞記事の存在を私が知ったのは、作家の生誕 100周年に刊行された数ある研究書のなかの次の一冊を通してである。セレネッラ・イオヴィーノ著『カルヴィーノの動物たち——人新世からの物語』(Serenella Iovino, *Gli animali di Calvino. Storie dall'antropocene*, Treccani, 2023)。題名にあるとおり、この評論の主な考察の対象は、カルヴィーノの作品群に頻出する動物と、人間の活動によって大きな変化を被った彼らの生息環境である。副題は「人新世からの物語」の意。人新世(ひとしんせい、じんしんせい)とは、人類の経済活動や核実験などによる地球への影響を考慮した新たな地質年代のことで、オゾン層の破壊に警鐘を鳴らしたノーベル化学賞受賞者のパウル・クルツェンによって 2000 年に提唱された。多くの読者を獲得した齋藤幸平氏の著書『人新世の「資本論」』(集英社新書、2020 年)で、この言葉に

初めて接した方も少なくないだろう(実は私もそのひとり)。

もちろん、カルヴィーノの生きた時代にこのような用語はなかった。しかし、『カルヴィーノの動物たち』の著者のイオヴィーノによれば、人新世の根拠とされたグレート・アクセラレーション(人類の活動の大きな加速)の推移は、第二次世界大戦末期にスタートした彼の作品群と軌を一にしているのである。

放射能、大気と気候の変動、イタリアの風景を埋め尽くす雪崩れのようなセメント、産業社会によって広がった格差、さまざまな生活の形態に影響を与えるこれらすべての変化を書くことによってカルヴィーノは、地質学者たちがこの時代のために特定した主要な「圏」、すなわち、岩石圏、気圏、生物圏、社会圏における人新世の進行をたどっていたのである。(p. 22)

初期の作品から、遺作となった評論『アメリカでの講義』にいたるまで、カルヴィーノが動物に言及しない作品はむしろまれである。だがイオヴィーノは、そのこと自体が重要なのではないと述べて、次のように指摘する。

私たちの時代をとりわけ雄弁に物語る動物たちがいるように思われた。たとえば『アルゼンチン蟻』にあるとおり、はからずも田舎の生態系への侵略者となった外来種の蟻たちや、動物園の檻に囚われた生き物たち、または、科学の犠牲となった動物たち、猫や「人間の住む都市」で迷子になったほかの野生動物たち。これらの動物たちは、人新世における生の使者であると同時に代弁者であるように私には思われた。(p. 24)

イオヴィーノが自らの著書を、「動物説話集」ではなく、「私たちの質学的な現在における生物圏の案内役」(p. 25)と定義するゆえんである。イオヴィーノによれば、『マルコヴァルドさんの四季』の実験用のウサギ(「毒入りウサギ」)や、町に残された唯一のオアシスである庭になんとしめてもどまろうとする猫たち(「がんこな猫たちの住む

庭)」、あるいは、『パロマール』におけるバルセロナ動物園の白いゴリラ(「アルビノのゴリラ」)は、人新世の生物圏の代弁者なのである。

先に引用したカルヴィーノの新聞記事のなかで、「きつと、私たちは動物にたいして説明し、謝罪する必要がある。ときおり私たちが、彼らのものでもあるこの世界を大混乱に陥れることがあるとすれば」の一節がとりわけ心に残る。ここには早くも、地球は人間だけのものではなく、動物たちのものでもあるという、カルヴィーノの非人間中心的な世界観の一端が見られる。

私たちは原初より、動物たちに見つめ返される時、そのくもりのない透き通ったまなざしに、畏怖の念や、罪悪感を抱いてきたのではないだろうか。

イオヴィーノは触れていないが、この新聞記事のタイトル「ヤギたちは私たちを見ている」は、ヴィットリオ・デ・シーカの 1943 年の映画『子供たちは私たちを見ている』(*I bambini ci guardano* : 邦題は『子供たちは見ている』)を踏まえたものだろう。母の不倫と家族の崩壊を子供の無垢な眼を通して描いたこの映画のあと、デ・シーカは、ネオレアリズモの代表作『靴磨き』(1946 年)と『自転車泥棒』(1948 年)でも、少年を主人公に据えた。

カルヴィーノの記事を読んで、もう一本思い出した映画がある。1985 年のスウェーデン映画『マイライフ・アズ・ア・ドッグ』(ラッセ・ハルストレム監督)である。時代背景は、サッカーのワールドカップが開催された 1958 年のスウェーデン(17 歳のペレが W 杯にデビューした大会だ!)。結核を患う母の元を離れて暮らす少年の成長物語だが、彼はつねにこう考えるようにしている。ソ連の人工衛星に乗せられた雌犬ライカの運命に比べれば、自分の人生はまだまだ、と。宇宙開発の実験台にされたライカ、打ち上げから 10 日後に安楽死させられたというが、それまで、どんなに心細かったことだろうか？

(イタリア語講師)

* 人口約 3000 人の村で噛み締める、

スポーツの原風景*

山田 晃裕

3 度目の寄稿となるが、今回も旅の話をさせていただきたい。2024 年 3 月 25 日～4 月 3 日にかけて 7 泊 10 日で実施したツアーの話。初寄稿(2023 年 10 月号)でもお話しした、トレンティーノ・アルト・アディジェ州にあるロヴェレートでの国際大会【Torneo Internazionale “Città della Pace”】に今年も出場することができた。

私たち AC ミランアカデミー愛知としては節目となる 10 回目の出場。2012 年に初めて出場した時の子どもたち(当時 10 歳)は現在 21～22 歳でもう立派な大人だが、いまだにあの冒険のことをよく覚えてくれている。ありがたい限りだ。

そんな節目に思わぬプレゼントをいただくことになった。大会公式ムービーを私たち目線で仕上げてもらったのだ。今回出場した 12 名の子どもたち(2013 年生まれ)の今大会を通じた様子と、この大会に対する私の心情が綴られている。ぜひご覧いただきたい(下画像の QR コード、URL)。



<https://www.youtube.com/watch?v=xAps295Dg4I>

実のところ、今回のツアーは出だしからトラブルに見舞われた。3 月 25 日、関西国際空港からドーハ経由でミラノに渡航するはずが、ドーハにた

どり着く前におそらく機材のマイナートラブルが発生したため、カザフスタンのアルマトイに目的地が変更されてしまった(ダイバート)のである。この日は私の 40 歳の誕生日。不惑イヤーの幕開けとなる記念すべき 1 日がカザフスタンで終わりを告げるなんて誰が想像できただろうか。思わず笑ってしまった。

大事に至らなくて何よりだが、予定が大幅に狂ってしまうことは避けられない。子どもたちに「どうなるの?」と聞かれても、「分からんなあ、まあ楽しもうぜ」と笑って答えるツアー責任者はきっと私だけだろう(もちろん、送り出していた家族の皆様には、状況報告の連絡を入れたのでご安心を)。

空港内で待ち続けた時間はなんと 7 時間。さらに同地からドーハまでのフライトは 5 時間と、合計 12 時間のタイムロスが発生した。3 月 26 日早朝にミラノに着くはずが、空港に着いたのは同日 20 時過ぎ。名古屋を出発してからおよそ 43 時間が経過していた。思わぬ長い空旅となったが、このトラブルをきっかけにメンバーたちの絆は深まった。ミラノ滞在中に行うはずだった、Casa Milan(AC ミランクラブオフィス)訪問とサンシーロスタジアムツアーがお預けとなってしまったことだけが悔やまれる。

超弩級のトラブルから始まった 2024 年のパスクアツアー。前置きが長くなったが、今回は私たちのパスクエッタの恒例行事について話をしようと思う。舞台はトレントから 7km ほど離れた集落・ソプラモンテ(Sopramonte)。人口 3000 人にも満たない小さな「村」である。

この小さな村唯一のサッカークラブ・USD Sopramonte との交流が始まったのは 2016 年のことだった。トレント出身の当時のテクニカルディレクターが、クリスマス休暇中に同クラブを訪問した際、サッカー場のリニューアルオープンに伴うサッカー大会を開催したいという意向を受け入れて足を運ぶことになったのだ。大会方式は毎年異なるが、ロヴェレートの国際大会とはまた違う雰囲気味わえるという点で、私たちのパスクアツアーに新たな付加価値が生まれた。

この地を訪れるのは今年で 6 回目。今大会は 6 チーム総当たり、1 日かけて 5 試合を戦う。イタリ

ア入りしてから 3 月 28 日にシルミオーネ、翌 29 日にトレントでそれぞれ 1 試合ずつ、30・31 日はロヴェレートでは 5 試合を戦った。この日を含めると 4 日間で 12 試合。言わずもがなハードである。とはいえこの頃には子どもたちもイタリアの環境に十分適応できているので、現地でのアクティビティを締めくくるにふさわしい 1 日となりそうだ。

4 月 1 日の朝、ホテルを出発した私たちのバスは山道をグイグイ登る。切り立った山並みの合間を縫うダイナミックな 40 分間のドライブの後、会場となるサッカー場に到着した。バスを降りても鳥のさえずりしか聞こえてこない。「思えば遠くに来たもんだ」とでも言いたくなる。

標高およそ 600 メートルのところにあるソプラモンテ。あいにく雨模様の中プレー準備に取り掛かる。晴れ渡った空とのコントラストを見せたかったところだが、残念なことに滞在中ほぼずっと天候に恵まれなかった。雲のかかり方を見て、子どもたちも標高の高さに気付いた模様。

気温は 8℃と低く、正午にかけて雨が激しくなるという予報だったため、スタッフ間で協議した結果「ガンガン前倒しでやろう！」ということに。時間にルーズとされているイタリア人にしては珍しい決断。こういう提案は大歓迎だったが、4 つあるロッカールーム備え付けのドライヤーがフル稼働するたびに施設全体が停電してしまうという、なんともイタリアらしい詰め甘い一幕にも出くわした。しかし、この手のトラブルを何とも思わなくなっていることに教え子たちの適応能力の高まりを感じる。これもまた成長だろうか。



午前中に 3 試合をこなすのだが、その締めくくりはトップチームがセリエ C に所属する AC トレント

との対戦。プロクラブの育成チームと対戦できるとあって、モチベーション高く臨み 2 点を先制することができたが、ハーフタイムに発破をかけられたようで、後半は相手の猛攻に遭って見事に 5 失点。実は相手は 2 学年下だった(敢えて子どもたちには伝えなかった)のだが、プロクラブのセレクションを経て鍛えられた選手たちのインテンシティ(プレー密度)の高さに感服した。

実はこの試合の後半から、フィールド内にはお肉の焼けるいい香りが立ち込めてきていた。毎年恒例なのだが全チーム一緒に過ごすランチタイムの準備に入っていた。今年は屋外のテントの下で、みんなで仲良くパニーノを喰らう。過去にはみんなで同じレストランを貸切にして大人子ども関係なく大騒ぎしたこともあった(案の定、午後の部のキックオフは 1 時間半遅れた)。

鉄板でお肉を焼いてくれるのはソプラモンテのコーチや選手のお母さんたち。笑顔で熱々のパニーノを渡されれば、誰だって顔が綻ぶ。こういうホスピタリティは、言葉の壁をあっさり壊してくれるものだ。

この大会では、指導者としては子どもたちにスポーツ面で多くを求めないと決めている。理由は 1 つ。人と人との心が触れ合う時に生まれる「温かさ」に触れてほしいから、である。会場に足を踏み入れたその時から、家路に着くまですべての大人も子どもも楽しむことにフォーカスしているように見える。

もちろん、スポーツシーンに欠かせない熱はある。午後最初の試合は、ホストチームであるソプラモンテとの一戦。当然会場に響く声援は大きくなる。SNS でスタンドからライブ配信をしていたところ、すぐ横で我が子を応援するお母さんの声が響いた。先ほどまでとびきりの笑顔を振りまきパニーノを手渡してくれていた女性が、母として息子に心の底からのエールを送っている。あちらの親御さん数人が集まり大きな声援を送っていたのだが、そこに相手を罵るような声は一切ない。むしろ私たちの好プレーを讃えてくれるのがとてもうれしかった。“Bravi giapponesi!!”という声援を受けながらプレーするのは、言語が完璧には理解できない子どもたちであれ自分たちに向けられた

エールであると分かったはず。これまでこの地でプレーした先輩たちと同様、すごくリラックスした表情でプレーしていたように見える。



この日会場に集うのは、選手とコーチ、その家族だけにとどまらない。大会名には Fausto Segata さんの名が刻まれている。食肉加工業者「Segata」の設立者であり、サラミやスペックの販路を拡大しながら USD Sopramonte を長きに渡って支えた地元の名士を偲ぶイベントでもある。故人の妻は施設内のバールを切り盛りしていたし、Segata ファミリーの同クラブへの愛が伝わってくるイベントだ。なお、ソプラモンテ出身のサッカー選手としては、セリエAでも活躍し、今季UC Sampdoria(セリエB)でキャプテンを務めたファビオ・デパオリがいる。AC ミランで活躍したアンドレア・ピルロが指揮官を務めるリグーリアの名門を牽引するデパオリ選手の活躍は、地元の子どもたちにとって大きな刺激になっているに違いない。

人口 3000 人未満の村のサッカー場に 1 日いるだけでもこれだけ多くのエピソードが発見できるのだから、改めてサッカー文化の裾野の広さを思い知らされる。心がほっこりするのと同時に、思わず「うらやましい」と心の声が漏れてしまう私は欲張りなのだろうか。

規模に大小こそあれど、イタリア全土に 11,282 のアマチュアサッカークラブが存在するという。生まれ育った地域のクラブを支えたいと願うことは、「生きるために呼吸する」ぐらい当たり前のことのように思える。性別も年齢もプレー経験も関係ない。この空間に溢れているのはきっと“Amore Incondizionato(無条件の愛)”。同じ時間を共有している誰もが、ピッチの中を駆け回るサッカー少年少女たちの成長を願っているのだ。成績の

良し悪しだけでは推し量れない「スポーツは人を育てる」というメッセージを共有できる場所。これこそ「スポーツの原風景」なのではないかと私は思う。

なおトレンティーノの片田舎あるあるとして、これは毎年のことであるが、朝からお酒がとんでもないペースで消費されていく。5 人しかいなくてもビールが 8 杯出てくるような、少々とち狂った計算が当たり前に。これはイタリア人にとってもあるあるネタのようで、「トレンティーノに 1 週間いたんだよ」と伝えると、十中八九「そりやお前たっぷり酒飲まされたらろ？」という言葉が返ってくるから、私が足を踏み入れた空間は、ある意味危険なのかもしれない。

今年も御多分に洩れず、私は午後の試合を若手のスタッフに指揮を任せる形に。チームを外から見守りつつ、バール周辺での「ロビー活動」に明け暮れるのが毎年の恒例行事だ。少しも気が抜けないのは、クラブ会長が私をしつこく追いかけてくるから。グラスが空に近づくとなぜかいつもすぐそこにいる。そして、お酒をドバドバ注ぎながらこう言うのだ。

「なあ、Aki。大会オーガナイズに関するフィードバックを是非とも聞かせてくれよ」と。

閉会式後ようやく少しだけ晴れ間が見えた。スポーツの原風景がくっきりと見える。でも、酒樽が空になるまで帰れない。

パスクエッタはソプラモンテに限る。

(AC ミランアカデミー愛知)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>